



IDÉE  
Life in Art 01

**Shu Kuroki** 黒木 周

## 「カタチ」展

2016年3月4日(金)～30日(水)

宮崎県都城市を拠点に活動し、国内外で作品を発表している版画家・黒木周。身の回りの風景やあらゆるものを「カタチ」として切り取り、色と形、そしてその配色によって広がる、懐かしくもあり、新しくもある独特の世界観をもっています。そんな黒木氏の作品が生まれた背景を伺ってきました。

宮崎県都城市、大きな銀杏の木の横に建つ、味わいのある白い建物。ここに版画家・黒木周氏のアトリエとギャラリーがあります。

点、ブロック、アーチ、重なる、接する、列なる、凹む…身の回りにある自然やあらゆるモノを「カタチ」として切り取り、配置し直し、美しい色をのせていく。クロスグラフという独自の技法で制作された黒木氏の作品の数々は、見る人の記憶や創造を刺激し、その人の経験や思い出の断片とシンクロするような柔らかさやあたたかさにあふれています。そんな作品が生まれた背景には、家業、音楽、恩師との出会いがありました。

## 受け継がれる系譜 育まれた感性

黒木氏のアトリエがある建物は、以前、着物の洗い張りから湯のしなどの作業場や、着付けや和装教室などに使われており、代々着物仕事を生業としてきた黒木家の仕事場でありました。

曾祖父は、絵付けから染色、染み抜きなどをこなす染色補正職人、祖父は紋型やその道具までも手づくりする手書きの紋書き職人と、幼い頃から黒木氏の日常は、着物の美しい絵柄や紋、布、それらをつくるさまざまな道具に囲まれ、そこで豊かな感性が育まれてきました。こうした家庭環境の中で、自他ともに将来は美術の道を志すものとされながらも、地元で学ぶ美術の世界にまだはっきりとした目標を見いだせないでいた頃、近所の小さな書店で目にとまった一冊の雑誌、イラストレーター吉田カツ氏が描いた表紙の絵に衝撃を受けました。兄の影響もあり、小学生の頃からロックやパンク音楽などにのめり込んでいた黒木氏は、吉田カツ氏のその自由な感性と奔放な表現力に心を動かされ、音楽と同じようにアートが近い存在となり、絵やデザインの世界への目標と大きな一歩を踏みかけになりました。

現在も黒木氏にとって、絵と音楽は欠かすことができないものとなっていること、殊に音楽は作品制作中も欠かすことができず、その作品の佇まいに影響を及ぼすことも。さまざまなジャンルの音楽を経て、現在は、クラシック音楽もレパートリーに加え作業に取り組んでいるそうです。



## 恩師との出会い たどりついた独自の技法

通常のリトグラフは石版かアルミ版を使用しますが、黒木氏の独自の技法であるクロスグラフとは、ベニヤ板の上に布（クロス）を貼り、油性材料で描く技法です。多摩美術大学時の恩師である版画家・小作青史（オザクセイジ）氏が考案した、ベニヤをつかった木製リトグラフがベースとなり、黒木氏が生み出したもの。黒木氏は、小作先生が今の自分の版画の礎を築いてくれたといいます。リトグラフの授業で、自国では石がとれないから卒業しても続けていくのは難しいという留学生や、プレス機の値段が高く揃えるのが難しいといった理由で諦めようとする生徒の声から、自ら長い年月をかけてベニヤで作るリトグラフを開発してきた小作先生。言い訳をゆるさず、思考を変えて自ら手を動かすことで解決していくその姿勢、実行力、技術的なことまでも全てにおいてヒントを与えてくれました。そんな偉大な恩師の影響により、試行錯誤を重ねたどり着いた独自の技法が、クロスグラフです。

木版のリトグラフの作品には木目がでてくるため、その表情が面白くもあり、個性も強く、絵に強さが求められてくる。それに比べ、クロスグラフは、布素材特有のやわらかな質感があり、布で刷ったその色は、ふくみから、奥行きなど木版とは全く違う表現の広がりを見せ、新たな個性を生み出しました。幼い頃から着物に触れていたため、布の感触には親しみがあり、布目や織が見えてきて、スムーズに自身の感性に馴染んだと黒木氏はいいます。

今回の展覧会のタイトルにもなっている「カタチ」、黒木氏の作品を印象づけるそのモチーフは、身近にある自然現象、紐や消しゴムといった目の前の道具、身のまわりのあらゆるモノたち。それらをカタチとして切り取り、配置し直しているため、抽象的なようで実は具象的な見方によって生み出されたもの。そのカタチは、黒木氏の手によって作品として生まれ、空間の中で心地よい存在感をはなち、またどんな空間にも馴染んでいくようなおおらかな魅力を持ち合わせています。

